

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Actual Use of the Deictic Words (Ko, So, A, Do) are Used in the Corpus of Everyday Japanese Conversation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 祐子, 田嶋, 明日香, 高崎, みどり, HOSHINO, Yuko, TAJIMA, Asuka, TAKASAKI, Midori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003569

『日本語日常会話コーパス』を利用した 指示語（コソアド）の用法の識別について

星野祐子^a 田嶋明日香^b 高崎みどり^c

^a 十文字学園女子大学／国立国語研究所 共同研究員

^b 光村教育図書株式会社

^c お茶の水女子大学名誉教授／国立国語研究所 共同研究員

要旨

『日本語日常会話コーパス』(Corpus of Everyday Japanese Conversation) のモニター公開版のデータ (50 時間分) を用いて、指示語（コソアド）の使用実態を報告した。また、動画を参照し、形式的に指示語に由来するフィラーについて、その用法の識別を検討した。

「コソアド」には、指示語の用法（連体詞・副詞・代名詞・名詞）と、指示語由来の応答・感情・フィラーなどを表す用法（感動詞）とがある。しかしながら、CEJC において、「そう」「こう」「この」は、フィラー用法があるにもかかわらず、感動詞としての用法が設けられていない。そこで、この 3 語に着目し、動画を参照しながら、「そう」「こう」「この」の用法の識別を試みた。副詞や連体詞としての用法と、感動詞・フィラーとしての用法が、区別できるケースもあったが、話者の意図やそれに伴う身振りが明確でないことから、用法に連続性が認められたり、指示性が途中で流れ（希薄化ないし消失）したりして、区別できない場合もあった。よって、CEJC の認定および分類方法は妥当であると考え*。

キーワード：日本語日常会話コーパス, CEJC, 指示語, フィラー, 身振り

1. はじめに

本稿は、国立国語研究所のプロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー・小磯花絵) 主催のシンポジウム IV (2019.8.30) における発表「日本語日常会話コーパスを利用した指示語と身振りの研究」(高崎みどり 星野祐子 田嶋明日香) において、日常会話における指示語と身振りの関係を観察した際、指示語の認定に課題がみられたことから端を発している。

本稿の目的は、『日本語日常会話コーパス』(Corpus of Everyday Japanese Conversation, 以下 CEJC) を用いて、指示語の使用実態と指示語由来のフィラーの認定について考察を行うことである。分析対象とするデータは、2018 年度版としてモニター公開された 50 時間分のデータ (小磯他 2019) である。なお、2021 年 2 月には、2020 年度版として 50 時間分がオンライン検索システム『中納言』上で追加公開されているが、この 2020 年度版では映像データの参照はできないため、本研究では映像データを含んでいる 2018 年度版の 50 時間分を利用した。

* 本稿は、シンポジウム「日常会話コーパス」VI (2021.3.4) での口頭発表『『日本語日常会話コーパス』を利用した指示語の用法の識別』の内容をもとに、再構成したものである。また、本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー：小磯花絵) の研究成果である。ここに記して感謝申し上げる。

まず、本コーパス全体における「指示語（コソアド）」のデータを示す。これらのデータを基にして、特に指示用法と指示用法以外の用法、すなわち品詞でいえば、「副詞」「連体詞」として認定されているものと、それ以外の「感動詞 - 一般」「感動詞 - フィラー」と認定されているものとの関係に注目する。

2. 指示語（コソアド）データの整理と分析

指示語を頻度順に整理し、系別（コ系、ソ系などの別）の使用実態を把握する。

2.1 全体の頻度順データ

最初に、論題にもある「指示語（コソアド）」について、本稿での示し方・捉え方について述べる。

一般的に、「指示語＝コソアド」として捉えられることもあるが、本稿では、「指示語」を指示代名詞・指示副詞・指示連体詞と不定・疑問詞の上位概念として捉え、“指示”という文法的な働きで体系を形成する語の名称とする。一方、「コソアド」または「コソア」は、形式として語頭にコ・ソ・ア（・ド）という形態素をもち、指示語や指示語由来で応答・感情・フィラーなどを表す語を広く指すものとする。こうした前提にもとづき、CEJC にみられる指示語を整理し、分析することとした。

まず、品詞「感動詞 - フィラー」「感動詞 - 一般」を含むコソアド全体の出現回数をみた。全体では総計 45,017 回、47 種類¹の使用がみられた。表 1 では上位 20 位を示す。

¹ 語彙素と品詞の組み合わせで種類を区別している。例えば、表 1 の 18 位と 19 位の語彙素「そんな」を、品詞「連体詞」と品詞「形状詞 - 一般」で 2 種類とし区別して計上した。このようにすると、全部で 47 種類のコソアドが認められることとなった。

表1 コソアド全体の出現回数

順位	系	語彙素	語彙素読み	品詞	頻度
1	ソ系	そう	ソウ	副詞	13,749
2	ア系	ああ	アア	感動詞 - 一般	5,090
3	ア系	あの	アノ	感動詞 - フィラー	4,354
4	ソ系	其れ	ソレ	代名詞	3,724
5	コ系	此れ	コレ	代名詞	3,082
6	コ系	こう	コウ	副詞	1,781
7	ソ系	其の	ソノ	連体詞	1,663
8	ア系	彼れ	アレ	代名詞	1,657
9	コ系	此の	コノ	連体詞	1,117
10	ド系	どう	ドウ	副詞	1,111
11	コ系	此処	ココ	代名詞	898
12	ソ系	其処	ソコ	代名詞	765
13	ソ系	その	ソノ	感動詞 - フィラー	735
14	ア系	彼の	アノ	連体詞	612
15	コ系	此方	コチラ	代名詞	606
16	ア系	あれ	アレ	感動詞 - 一般	562
17	ド系	何処	ドコ	代名詞	553
18	ソ系	そんな	ソナ	連体詞	457
19	ソ系	そんな	ソナ	形状詞 - 一般	430
20	ア系	彼処	アソコ	代名詞	419

次に、CEJC に出現した全コソアド 45,017 語を 4 系別にまとめて示す（表 2）。

表2 CEJC における指示語の数量データ 系統別

順位	系	頻度
1	ソ系	21,660
2	ア系	13,152
3	コ系	8,006
4	ド系	2,199
総計		45,017

系別ではソ系が最も多用され、次はア系であった。ソ系では副詞「ソウ」が最多で、コソアド全体でも 1 位である。ア系では感動詞 - 一般の「アア」、感動詞 - フィラーの「アノ」が全体の 2 位、3 位を占めていることが注目される。なお、同形式であるが、品詞が異なる副詞の「アア」は全体の 29 位、連体詞の「アノ」は 14 位である。指示用法に該当する品詞と感動詞との関係については次節で述べる。コ系では代名詞「コレ」、副詞「コウ」が上位である。

2.2 コソアド別の頻度順位データ

次に、コソアド別の頻度順位データを示す（表 3, 4, 5, 6）。順位はそれぞれの系別の順位であり、全体順位は、47 種類のコソアド全体を通しての使用順位である。

表3 CEJCにおける指示語の数量データ コ系 (11種類)

順位	全体順位	語彙素	語彙素読み	品詞	頻度
1	5	此れ	コレ	代名詞	3,082
2	6	こう	コウ	副詞	1,781
3	9	此の	コノ	連体詞	1,117
4	11	此処	ココ	代名詞	898
5	15	此方	コチラ	代名詞	606
6	22	こんな	コンナ	連体詞	196
7	23	こんな	コンナ	形状詞 - 一般	154
8	25	此の間	コノアイダ	名詞 - 普通名詞 - 一般	141
9	34	此方側	コチラガワ	名詞 - 普通名詞 - 一般	28
10	40	此の頃	コノゴロ	名詞 - 普通名詞 - 一般	2
11	42	此の世	コノヨ	名詞 - 普通名詞 - 一般	1
総計					8,006

表4 CEJCにおける指示語の数量データ ソ系 (11種類)

順位	全体順位	語彙素	語彙素読み	品詞	頻度
1	1	そう	ソウ	副詞	13,749
2	4	其れ	ソレ	代名詞	3,724
3	7	其の	ソノ	連体詞	1,663
4	12	其処	ソコ	代名詞	765
5	13	その	ソノ	感動詞 - フィラー	735
6	18	そんな	ソンナ	連体詞	457
7	19	そんな	ソンナ	形状詞 - 一般	430
8	27	其方	ソチラ	代名詞	133
9	40	其方側	ソチラガワ	名詞 - 普通名詞 - 一般	2
10	42	それ	ソレ	感動詞 - 一般	1
10	42	そんなこんな	ソンナコンナ	形状詞 - 一般	1
総計					21,660

表5 CEJCにおける指示語の数量データ ア系 (13種類)

順位	全体順位	語彙素	語彙素読み	品詞	頻度
1	2	ああ	アア	感動詞 - 一般	5,090
2	3	あの	アノ	感動詞 - フィラー	4,354
3	8	彼れ	アレ	代名詞	1,657
4	14	彼の	アノ	連体詞	612
5	16	あれ	アレ	感動詞 - 一般	562
6	20	彼処	アソコ	代名詞	419
7	23	あー	アー	感動詞 - フィラー	154
8	28	彼方	アチラ	代名詞	104
9	29	ああ	アア	副詞	98
10	32	あんな	アンナ	連体詞	50
11	33	あんな	アンナ	形状詞 - 一般	43
12	37	彼方此方	アチラコチラ	代名詞	8
13	42	彼の世	アノヨ	名詞 - 普通名詞 - 一般	1
総計					13,152

表6 CEJCにおける指示語の数量データ ド系（12種類）

順位	全体順位	語彙素	語彙素読み	品詞	頻度
1	10	どう	ドウ	副詞	1,111
2	17	何処	ドコ	代名詞	553
3	21	何方	ドチラ	代名詞	244
4	26	何れ	ドレ	代名詞	134
5	30	何の	ドノ	連体詞	61
6	31	どんな	ドンナ	連体詞	52
7	35	どんな	ドンナ	形状詞 - 一般	18
8	36	どれ	ドレ	感動詞 - 一般	10
9	37	何処何処	ドコドコ	代名詞	8
10	39	どうこう	ドウコウ	副詞	6
11	42	何方利き	ドチラキキ	名詞 - 普通名詞 - 一般	1
11	42	何方回り	ドチラマワリ	名詞 - 普通名詞 - 一般	1
総計					2,199

それぞれの系によって多く使用される形態・品詞は異なっており、この表のかぎりでは、コ系では代名詞「コレ」、ソ系では副詞「ソウ」、ア系では感動詞 - 一般「アア」、ド系では副詞「ドウ」が最も多用される形態となっている。

なお、本稿で注目する「そう」「こう」「この」は、「そう」と「こう」が副詞、「この」が連体詞として扱われている。ただし、この3語の使用回数（「そう」13,749、「こう」1,781、「この」1,117）には「感動詞 - フィラー」として分類される用法が含まれている点を考慮する必要がある。

3. 指示用法以外の用法

ここでは指示用法、すなわち品詞でいえば、代名詞・副詞・連体詞として認定されているものと、指示用法以外の感動詞 - 一般・感動詞 - フィラーと認定されているものとの関係に注目した。実際の用例を検討する過程で、感動詞 - 一般や感動詞 - フィラーと認定されていないものの中にも、指示用法以外の用法として、応答やフィラーの用法が含まれているものがあるのではないか、と考えたためである。

そこで、「フィラー」とはどのような性質を備える形式なのかを先行研究より理解し、加えて、CEJCではフィラー認定がどのようになされているかを確認する。

3.1 フィラーに関する先行研究

そもそも「フィラー」の定義はどのようになされているだろうか。

事典類をみると、『新版 日本語教育事典』では、「ことばを探したり、会話の順をとるための声出し。また、一時的に文を述べることを中断するときに発する」、『研究社 日本語教育事典』では、「それらがなくても発話の意味に影響しないような音声」とされている。

先行研究では、まず山根（2002: 49）において、「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない、発話の一部分を埋める音声現象」とされる。その

機能・役割についても、同じく山根（2002: 41）が、先行研究を整理したものとして、【沈黙回避 時間稼ぎ 整調 自発話確認 換言・修正 分割 継続示唆 不確かさ表明 注意喚起 発話促し 話者交替 躊躇 和らげ 理解障害 その他】を挙げている。

続いて、指示語由来のフィラーと指示語との関係性についてみると、山根（2002: 50）は、フィラーの種類として挙げた 11 種のうち、「(4) コーソー型」には、話し手が動作などでその状態を示すときに使用される「こう」や、応答冒頭の「ソーデスネ」は含めないとする。「(4) コーソー型」の具体的な形式には、「コ（－）」「コーネ」「ソ（－）」「ソーネ」などがある。また、「(5) コソア型」の「コノ（－）」「ソノ（－）」「アノ（－）」については、「人や物、直前の発話で述べられたことを指示する以外に用いられるもの」のみをフィラーとしている。すなわち、山根（2002）においては、指示語由来のフィラーの認定を、指示の働きをもたないものに限定していることがわかる。

一方、定延（2002）においては、「うん」と「そう」を比較して、応答・気づき・フィラー等を含む感動詞「そう」は、「照応詞」の「そう」の意味が希薄化したものと位置づければ、感動詞「そう」には（指示詞「そう」由来の）意味がある、とする。

坊農（2002）は「うん」と「そう」を比較して、会話の応答箇所で発せられる「そう」は指示表現から派生したものであり、指示性があるといえる、とする。

すなわち、これらにおいては、指示語「そう」由来の感動詞・応答詞に、指示語とのつながりを認めていると思われ、指示語とフィラーも連続的に捉えられる可能性を示唆しているといえよう。

3.2 CEJC におけるフィラー認定

では、CEJC におけるフィラー認定は、どのようなものであるか。CEJC におけるフィラーの認定基準を表 7 に示す（臼田他 2018: 180）。

表 7 CEJC におけるフィラー認定

基本表現	あ（－）、い（－）、う（－）、え（－）、お（－）、ん（－）、と（－）*、っと（－）*、あ（－）（ん）（－）の（－）*、そ（－）（ん）（－）の（－）*、う（－）ん、う（－）ん（－）（っ）と（－）*、ん（－）（っ）と（－）*、あ（－）（っ）と（－）*、え（－）（っ）と（－）*	
組み合わせ	上記基本表現＋「ですね（:）」「っすね（:）」 上記*付きの表現＋「ね（:）」「さ（:）」	例）あのですね： 例）とね.:、んーっとさ：

CEJC における基準としては、表 7 の通りとなるが、これらの形式が、実際のフィラーを反映しているかという点必ずしもそうではない。注記として、「これらの形式であっても場つなぎ機能を有していないものや、場つなぎ機能を有しているが表 1² の形式ではないものは、フィラーとはみなさない」という記載があった。

² 引用文中の表 1 は、本稿における表 7 を意味する。

3.3 コソアドの品詞認定について

ここで、フィラーと関連を持つコ系・ソ系・ア系・ド系の諸形式について、CEJCにおける品詞認定を確認してみよう。すると、表8のような分類、および数量的な結果となった。

表8 コ系・ソ系・ア系・ド系の品詞認定

系	語彙素	語彙素読み	品詞	頻度
コ系	こう	コウ	副詞	1,781
	此の	コノ	連体詞	1,117
ソ系	そう	ソウ	副詞	13,749
	其の	ソノ	連体詞	1,663
	その		感動詞 - フィラー	735
	其れ	ソレ	代名詞	3,724
	それ		感動詞 - 一般	1
ア系	ああ	アア	副詞	98
	ああ		感動詞 - 一般	5,090
	あー	アー	感動詞 - フィラー	154
	彼れ	アレ	代名詞	1,657
	あれ		感動詞 - 一般	562
	彼の	アノ	連体詞	612
	あの		感動詞 - フィラー	4,354
ド系	何れ	ドレ	代名詞	134
	どれ		感動詞 - 一般	10

表8より、「こう」「この」「そう」はフィラーの認定をせず、「その」「ああ（あー）」「あの」は連体詞・副詞とフィラーとを区別しているということがわかった。しかしながら、指示語と身振りの関係を観察するには、「こう」「この」「その」においても、指示語とフィラーを区別する必要が生じてくる。

そこで、本研究では、CEJCにおいて、フィラーとフィラー以外の用法が区別されていない「こう」「この」「そう」について、指示性の強弱や機能を分析し、その用法を判断する作業を進めていった。

その際、指示性を希薄化した過程で、どのような意味や機能を獲得してフィラーとなりえたか、それらは実際のやりとりの中でどのような働きをするかも併せて検討していった。

4. 分析

具体的な分析に先立ち、用法の識別方法と研究課題について述べる。

先に示したように、例えば、副詞「そう」の頻度は13,749であり、一つひとつの発話について、指示語としての用法とフィラーとしての用法を検討・区別するのは難しい。そこで、まずは共起関係等でスクリーニングし、用法の識別を機械的に行った。もちろん、機械的判断なので、すべ

てが確かであるとはいえないが、ある程度の傾向を捉えることはできる。続いて、映像や音声から、指示性の強弱を質的に判断し、フィラーと指示語の機能を認定することを試みた。

4.1 対象語の頻度

表9は、CEJCに出現する指示語の頻度を上位10位まで示したものである。本稿で分析対象とした「そう」「こう」「この」は上位10位（1位・4位・7位）に入っており、「そう」の頻度が突出して多い。前述したように「そう」の全用例を確認することは困難であるため、前後の語彙素によって用法を判断することにした。

表9 CEJCにおける指示語の頻度（上位10位）

順位	系	語彙素	語彙素読み	品詞	頻度
1	ソ系	そう	ソウ	副詞	13,749
2	ソ系	其れ	ソレ	代名詞	3,724
3	コ系	此れ	コレ	代名詞	3,082
4	コ系	こう	コウ	副詞	1,781
5	ソ系	其の	ソノ	連体詞	1,663
6	ア系	彼れ	アレ	代名詞	1,657
7	コ系	此の	コノ	連体詞	1,117
8	ド系	どう	ドウ	副詞	1,111
9	コ系	此処	ココ	代名詞	898
10	ソ系	其処	ソコ	代名詞	765

まず、「そう」は、用言（動詞・形状詞）と後方共起しているものを副詞用法だと判断した。オンライン検索システム『中納言』では前後10語以内の検索が可能であり、全文検索システム『ひまわり』では前後2語までの検索結果が表示される。共起が離れすぎていると、「そう」と後方の語が修飾・被修飾の関係にない場合があるため、今回は後方2語までを共起範囲としている。その結果、後方2語が用言である副詞用法の「そう」は、13,749例中2,062例であり、「そう」全体の約15%という結果が得られた。

続いて、「そう」は相槌・応答として使用されることが多い点に着目した。相槌・応答用法を抽出するにあたっては、繰り返しの「そう」、発話末の「そう」、後方1語が助詞・助動詞の「そう」であることを抽出条件とした。抽出の結果、11,606例が相槌・応答の「そう」であり、「そう」全体の約84%を占めている。

こうした機械的判断を経て、副詞および相槌・応答に該当しない81例に、いわゆるフィラーとしての用法が混在していると考えた。

同様に、「こう」については、後方2語までが用言のものを副詞用法とし、それ以外にフィラー的用法が混在していると考えた。「この」については、後方2語までが名詞のものが連体詞用法とし、それ以外にフィラー的用法が混在していると考えた。

表10は、以上の分類結果をまとめたものである。Aに相当する用法は、CEJCに登録されている用法と、実際の使用に相違がないと考えられる用法である。対して、Bに相当する用法は、

CEJC に登録されている用法と、実際の使用に相違があると考えられる用法である。例えば、フィラーとしての特徴を備える発話は B に分類される。もっとも、機械的判断での結果であるため、頻度数には若干の揺れがあると考えられるが、大体の傾向はつかむことができる。

表 10 「そう」「こう」「この」の用法別頻度

語	用法	判断基準	例	頻度	計
そう	A: 副詞	後方 2 語以内が用言	そうゆう そうは言っても	2,062	13,749
そう	B1: その他 (相槌・応答)	繰り返しの「そう」／発話末／後方 1 語が助詞・助動詞	そう そう そう。 そうですね。	11,606	
そう	B2: その他 (相槌・応答以外)	A と B1 の基準から外れる用法	※ 本稿で分析	81	
こう	A: 副詞	後方 2 語以内が用言	こうやって こう腕上げて	911	1,781
こう	B: その他	A の基準から外れる用法	※ 本稿で分析	870	
この	A: 連体詞	後方 2 語以内が名詞	この前 この白いやつ	882	1,117
この	B: その他	A の基準から外れる用法	※ 本稿で分析	235	

それでは、本稿で分析する B2 の「そう」や、B の「こう」「この」に分類される発話はどのような状況で発話されていたのだろうか。次節では動画データを参照しながら、これらに分類された発話について、確認した点を述べる。

4.2 分析対象となる話者の選定

表 10 で示したように、共起関係による判断から、フィラーの可能性のあるものは、「そう」81 例、「こう」870 例、「この」235 例という結果となった。

表 11 は、フィラーの可能性のある「そう」「こう」「この」の頻度を話者別（上位 5 名）に示したものである。

表 11 フィラーの可能性のある「そう」「こう」「この」の話者別頻度

[B2 その他] の「そう」			[B その他] の「こう」			[B その他] の「この」		
順位	話者 ID	頻度	順位	話者 ID	頻度	順位	話者 ID	頻度
1	★ T006	7	1	★ T006	48	1	T002	14
1	K001	7	2	T007	39	2	K002	8
2	T013	6	3	S001_009	37	2	T016_001	8
3	T003	4	4	T004	33	3	C002	6
4	T004_033	3	5	T002	27	3	★ T006	6

表 11 に示した通り、「そう」「こう」「この」いずれにおいても、話者 T006（表 11 において ★ 印を付与）が上位に入っている。そのため、同一話者における使用の様相を捉えることを意図し、

話者 ID T006 (IC01_ 尾形³) の発話を分析対象とした。ここでは、表 12 に示したもののうち、T006_002 および T006_004 の会話を扱う。

会話例の転記にあたっては、当該発話の開始時間 (分:秒)、発話者、発話内容を示す。注目する指示語については、適宜①、②といった記号を発話内に付す。また、会話例に示された各種タグについては、小磯他 (2019: 14) から「表 2.5: 転記テキストに用いるタグの一覧」を引用し、該当タグの説明を付す。

表 12 話者 T006 (IC01_ 尾形) の参加会話

会話 ID	会話概要	時間	話者数	形式
T006_001	大学の教員室でサークル顧問の先生と雑談	28 分	2	雑談
T006_002	大学で後輩 2 人と就活について	46 分	3	用談相談
T006_004	飲食店で大学の先生・後輩 2 人と授業の打上げ	45 分	5	雑談
T006_008a	飲食店で中学時代の同級生と飲み会	17 分	4	雑談
T006_009	飲食店で中学時代の同級生と食事しながら	14 分	2	雑談

4.3 「そう」の分析結果

T006 の発話を動画データとともに確認したところ、整調、思い出し、話題の切り替え、自己相槌といったフィラーの機能を認めることができた。ただし、フィラーとしての「そう」の機能には、グラデーションがあり、映像データをみても認定が困難なケースもあった。

T006_002 のデータより、話者の尾形によって「そう」が連続して用いられる場面をみてみよう。

会話例 1 大学の課題について

34:09	IC02_ 富永	感想文:(0.199) 書いて。
34:10	IC01_ 尾形	①そう。
34:11	IC03_ 青木	それで優っすもんね:。
34:11	IC02_ 富永	(L)
34:12	IC01_ 尾形	②そう。
34:12	IC03_ 青木	(L)
34:12	IC01_ 尾形	(L)
34:13	IC03_ 青木	最高じゃないすか。
34:14	IC01_ 尾形	うん。
34:16	IC03_ 青木	(T いや:)。
34:16	IC01_ 尾形	③そう。
34:17	IC01_ 尾形	俺のね: ④そう (0.277) ん (.) 俺 卒論: の先生が非常勤の (0.36) 先生で: 。
34:21	IC03_ 青木	はいはい。
34:21	IC03_ 青木	うん。

【タグの説明】

: 非語彙的な母音の引き伸ばし, (L) 笑いが生じている箇所, あるいは単独の笑い, (T) 小さい声で発話している箇所

³ 話者 ID T006 の尾形は、25-29 歳の年齢区分に相当する男性である。東京都出身で、東京都に在住、収録時は大学院生であった。

①、②の「そう」は、相手に視線を送り、頷きの行動がみられた。これらは表 10 で示した B1 の相槌・応答用法となる。富永と青木が共同発話の形で提供した話題、すなわち「感想文を書いて優の評価をもらえる」という話題への相槌・応答ということになろう。

③の「そう」は視線を外した形で発せられた「そう」である。コーパスをもとにした機械的判断では、「そう」の直後に句点が伴っているため、B1 の相槌・応答用法となる。ただし、相槌そのものは、既に先行発話の「うん」(34:14) でなされたと考え、③の「そう」は話題の切り替えの機能を伴ったフィラーであると捉えることもできる。

「そう」の備える機能がグラデーションであることを示す例である。

最後に④の「そう」について考えてみよう。当該発話が発せられた際は、図 1 のように、顔を右横に向け、視線を右後ろに移動させながら、小さく頷くような動きを見せた。ここで、想定される「そう」の機能としては、新たな話題を導くための自身の経験の思い出しや、自身の発話を導き出すためのリズム取りがあると考えられる。つまり、④の「そう」は、生起位置、共起関係、発話時の映像を考慮した結果、フィラーの「そう」と認定することができる。ソ系であるため、あくまでも文脈に沿って話題の方向を示しているという表明ともいえる。

次に取り上げる会話例 2 は、会話例 1 の約 30 秒後に展開する会話である。35:10 に含まれる①の「そう」についてその用法を考えてみたい。



図 1 会話例 1 ④の「そう」

会話例 2 就職活動について

34:58	IC01_尾形	今年のなんか(0.246)その(D シャ)(0.251)社会福祉協議会だっけ。
35:02	IC01_尾形	埼玉県。
35:02	IC03_青木	はいはい。
35:02	IC03_青木	社協。@社会福祉協議会の略
35:02	IC02_富永	うん。
35:03	IC03_青木	はい。
35:03	IC01_尾形	うん。
35:04	IC01_尾形	のなんか:(0.191)社福枠が:(1.405)毎年ある:んだよね。
35:09	IC03_青木	ああー。
35:09	IC02_富永	へー。
35:09	IC01_尾形	(D フツ)(D フ)二枠ぐらい。
35:09	IC03_青木	はいはいはい。
35:10	IC01_尾形	でも今年なんか一人しか付かなかった(1.118)とかで:(0.351)なんか(0.657)① <u>そう</u> それが行動に回ってきたらいいよ。
35:17	IC01_尾形	今年。
35:17	IC03_青木	えー。
35:17	IC02_富永	へー。

【タグの説明】

(D) 語の言いさし、@ 発話に対するコメント

①の「そう」は、フィラー相当と考えられる「なんか」と共起し、リズムを整えているという解釈が可能である。ここで、「そう」が挿入された発話について、一連の流れをみると、「今年なんか一人しか付かなかった」(＝就職の推薦枠が余った)ため、「それ」(＝推薦枠)が「行動」(＝専攻名と考えられる)に回ってきた、というふうに解釈することができる。また、「そう」の直前には、フィラーと考えられる「なんか」が表れ、フィラー同士が連続していることがわかる。

それでは、実際、①の「そう」には、どのような身振りが伴っていたのだろうか。図2を参照してほしい。「そう」の発話時には、前方に差し出した指でリズムを取りながら、やや視線を下にして頷いている様子が見て取れた。

以上の発話状況をふまえると、ここでの「そう」は、山根(2002)がフィラーとして挙げた「整調、自発話確認」に相当すると考えられる。



図2 会話例2①の「そう」

4.4 「こう」の分析結果

「こう」は「そう」と異なり、コ系の指示語を基にするため、話し手が目の前にある空間を活かしながら、身振りを表出する傾向にあった。「こう」によって、聞き手の注目を促したり、後続発話を導く準備に充てたり、などの機能がみられた。

また、「こう」も「そう」と同様に多機能であり、動画データとの照らし合わせによって、その機能を認定するに至った。ただし、副詞とフィラーとの見分けがつかない発話もあり、機能の連続性をうかがわせた。

まず、会話例3をみてみよう。

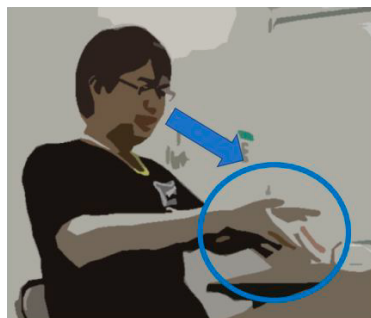


図3 会話例3①の「こう」

会話例3 ジェットコースターの安全装置について

39:21	IC02_ 富永	びって。
39:21	IC01_ 尾形	(D ウ)(D ウ)そう。
39:22	IC01_ 尾形	ここに① <u>こう</u> T字の(0.23)これが(0.345)腰 腰だけ固定されて。

会話例3は、ジェットコースターの安全装置を説明している場面である。会話例3の「こう」は、「こう」に係るべき動作(図3を参照)を修飾していると考えれば、副詞的な使用であるともいえるが、「ここ」や「これ」などで創出する身振り空間に注目させたり、「T字」や「固定される」を導き出すために使用されていたりすると考えれば、フィラー的な使用であると捉えるこ

とができる。

なお、「こう」の発話時の様子は図3のように、視線を手元に向け、ジェットコースターの安全装置を描写するかのような身振りをみせた。「こう」は副詞的にその動作を指しているともみえるが、次の表現を検索するかのようなフィラーとしての働きも観察された。

次に取り上げる会話例4も、会話例3と同様に、副詞とフィラーの両方に解釈できる発話である。会話例4は以下の通りである。「こう」に伴う身振りは図4である。

会話例4 食事について

40:40	IC01_尾形	んで:(0.288) 食事はなんか 食事もなんかすごい感じの (1.028) ビュッフェなんだけど。
40:44	IC02_富永	へー。
40:44	IC02_富永	うーん。
40:45	IC02_富永	(W ウ うん)。
40:45	IC03_青木	(W ハ はい) はい。
40:46	IC01_尾形	(D イ)(0.233) 朝夜と:。
40:48	IC03_青木	いいっすね。
40:48	IC01_尾形	うん。
40:49	IC01_尾形	なんか① <u>こう</u> (D ス) (F あの) ステーキ焼いてくれるやつとか (L ある)。
40:51	IC03_青木	(L)
40:51	IC01_尾形	(L)
40:51	IC02_富永	(L)

【タグの説明】

(W) 言い誤り・発音の怠け等の一時的な発音エラー, (F) 「あの」「その」類が連体詞ではなくフィラーとして用いられる場合

図4は、ホテルでシェフがステーキを焼いてくれるという話題において、「こう」が使用された場面である。上半身をやや後ろに動かし、シェフの動きを再現するかのような動作を見せた。

もし、会話例4の「こう」が、後続の「焼く」を修飾しているとしたら、「こう」は副詞的の用法と考えることができるだろう。一方、「こう」で後続発話に注目を促しつつ、後続発話を導く時間稼ぎの用法と捉えれば、直前に「なんか」、後続に「あの」を伴うことから、フィラー的の用法と考えることも可能である。ただし、「こう」に伴う身振りが、シェフの姿を再現するかのような明確なアクションであったことを考えると、やや副詞寄りの機能を備えているといえるかもしれない。

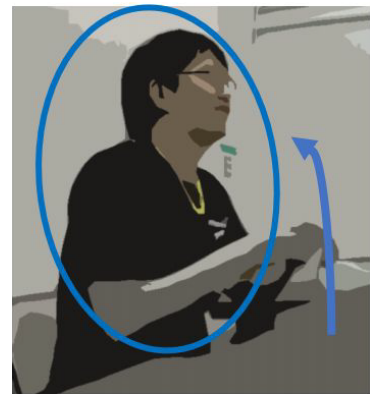


図4 会話例4①の「こう」

ここで、身振りの明確さについて考えてみると、会話例3, 4では、指示的な身振り（会話例3）と描写的な身振り（会話例4）といった違いはあるものの、「こう」に伴う身振りは明示的であった。では、明示的でない場合は、どのように解釈できるだろうか。続いて取り上げる会話例5は

「こう」に伴う身振りが明確でないパターンである。会話例 4 の直前に展開された会話である。

会話例 5 ホテルのプランについて

40:17	IC01_ 尾形	なんだけど。
40:18	IC01_ 尾形	それで ① <u>こう</u> (0.748) ホテルに泊まる % と :(.)(F あ の :)(0.641) スパーランドの :(.)(L フリーパスと)(0.3) 二 (W ロ 日) 二日分フリーパスと :(0.335) その温泉 フリーパスと :。
40:23	IC03_ 青木	あー。
40:23	IC03_ 青木	フリーパス。
40:25	IC03_ 青木	ああ。
40:28	IC03_ 青木	はい はい。

図 5 に示すように、「こう」に伴う身振りは、右腕を少し浮かせる程度で、具体的な身振りに至っていない。「泊まる」ということの再現が難しいのであろう。また、「こう」の直後に沈黙が生じていることから、会話例 5 の「こう」は副詞としての用法よりも、後続発話を導くためのフィラーとしての機能を備える「こう」であると考えることができる。

「こう」の分析の最後に、同一話者尾形の一連の発話に連続して「こう」が用いられたパターンを観察してみたい。



図 5 会話例 5 ①の「こう」

会話例 6 商品券を換金した話題

2:46	IC01_ 尾形	まあただなんか ① <u>こう</u> : 商品券が ② <u>こう</u> (0.126) 現金に化けた時の なんかつ ③ <u>こう</u> 得もゆえぬ なんかつ この (0.989) ちょっと ④ <u>こう</u> (0.356) やったぜみたい (L な)。
2:48	IC03_ 青木	はい はい。
2:51	IC02_ 富永	(L)
2:51	IC03_ 青木	(L あー)。
2:54	IC02_ 富永	やった (L ぜ)。

会話例 6 は、5 者間会話となる。CEJC にある映像資料は、360 度カメラの映像のみであったため、やや不鮮明ではあるが、「こう」が連続して用いられた場面での対象者（尾形）の身振りを確認していく。5 者間会話における対象者の着席位置を図 6-1 で示し、一連の発話に伴う身振りは図 6-2 で示す。

まず、①の「こう」では、左手を前に出しつつ、前方へ視線を向け、聞き手の注目を促すようなそぶりを見せる。①の「こう」の直前にもフィラーに相当する発話「まあ」「なんか」を確認することができ、先行のフィラー相当発話とあわせて、後続の発話を導く準備をするとともに、本題に入るタイミングをうかがっていると捉えることができる。

続く②の「こう」では、右手を左手と同じ高さに掲げ、空間を掴みつつ前方に視線を送る。この場面の身振りは、本発話の話題である「商品券」の形状を示し、それが「現金に化けた」という状況を指し示していると考ええる。「現金に化けた」を修飾しているため、副詞の機能を備える「こう」であると解釈することができる。

その後、③の「こう」では、手のひらを内側に向けつつ、手元に視線を落としている。視線の先にある仮設した「商品券」を見つめているかのような身振りである。また、③の「こう」の後には、「得もゆえぬ なんか この(0.989) ちょっと」とフィラーに相当する発話が続いているため、思いがけず「商品券」を手にし、それが「現金に化けた」際の心情を検索している最中であると捉えてもよいだろう。フィラー相当の「こう」と考えることができる。

そして、④の「こう」に至り、商品券が「現金に化けた」際の心情を、「やったぜ みたい(L な)」と言語化している。「やったぜ」という発話ならびにその心情を修飾していると捉えるのなら、④の「こう」は「副詞」ともいえるが、先行文脈で示された「得もゆえぬ」心情を検索している最中と捉えるのなら、フィラーの機能を備えているとも考えられる。

このように、周辺文脈や共起する動作・視線を確認しながらでも、「こう」の機能の認定は難しいことがわかる。特に④の「こう」は、修飾対象が後ろにあることから副詞と捉えられるが、自身の行動への幾分の後ろめたさと「得も言えぬ」心情を検索していると捉えれば「フィラー」としての側面を見出すこともできる。ここに副詞とフィラーの連続性をみてとることができる。



図 6-1 参加者の着席状況



図 6-2 会話例 6 ①②③④の「こう」

4.5 「この」の分析結果

既に取り上げた会話例 6 のなかから「この」に伴う動作を観察してみよう。特に注目したい部分を、会話例 7 として取り上げる。

会話例 7 (会話例 6「商品券を換金した話題」の一部抜粋)

2:46	IC01_ 尾形	まあただなんか こう : 商品券がこう (0.126) 現金に化けた時のなんか こう 得もゆえぬ なんか ❶この (0.989) ちょっと こう (0.356) やったぜ みたい (L な)。
------	----------	--

図 7 で、❶の「この」に伴う身振りを確認すると、「商品券が現金に化けた時」で示した手のポジションから、両手が幾分内側に入っている様子を観察することができる。さらに、直前の発話を確認すると「得もゆえぬ」やフィラーの「なんか」が表れているため、「商品券が現金に化けた」といった状況を指しつつも、現実には「この」の修飾先は“流れて”しまっているといえる。

もし、「この」の発話時に、何らかの指示対象が想定されていたと捉えれば、ここでの「この」は連体詞として使用意図があったとみることができるだろう。ところが、実際は、何を指しているかわかりにくい発話となってしまったため、結果としてはフィラーの機能が強く表れることとなった。つまり、指示意図の“流れ”がフィラーとしての要素を強くしたと捉えることができる。

続いて取り上げる会話例 8 も、会話例 6、会話例 7 と同じ場面で、5 者間でなされたものである。5 者の位置関係は図 6-1 を参照されたい。



図 7 会話例 7 ❶の「この」

会話例 8 専攻の男女比について

17:13	IC01_ 尾形	自分の代の 行動は :(0.55) 男が四人で :。
17:17	IC05_ 杉山	うん。
17:17	IC03_ 青木	(L)
17:18	IC01_ 尾形	で : 女子があと二十六人ですね。
17:19	IC03_ 青木	(L)
17:20	IC05_ 杉山	あー。
17:21	IC04_ 関本	最近 男 多いよね。
17:22	IC01_ 尾形	そうっすね。
17:22	IC04_ 関本	うん。
17:22	IC03_ 青木	行動 は多いっすね。
17:23	IC03_ 青木	なんか。
17:24	IC01_ 尾形	❶この なんか : (F その) 六期生だけ :(0.379) なんか :(0.506) 突出して少ないですよ。

ここでの会話は、「行動」と略される専攻の男女比がテーマとなっている。注目したい会話は「このなんか : (F その) 六期生だけ :(0.379) なんか :(0.506) 突出して少ないですよ」である。

まず、一連の会話の流れを追ってみよう。17:18 の段階において、尾形からの情報提供は一度終了している。その情報提供を受け、杉山・関本・青木が同意を示す。同意のバリエーションは、相槌であったり、先行発話のくり返しであったりするが、特に新しい情報が付け加えられる

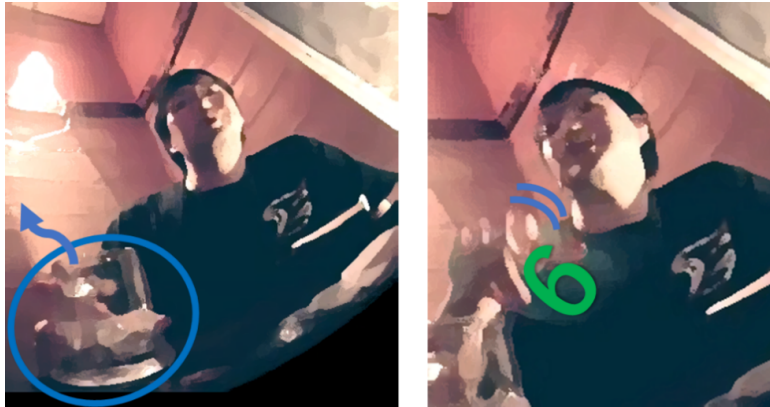


図8 会話例8①の「この」および「その」

ことはない。ちなみに、17:24の尾形の発言の直前に、青木が「なんか」と発話を続けようとしているが、結局発話は途切れてしまった。

続いて、17:24の尾形の身振りを確認してみよう。

「この」の発話時には、グラスから右手を離す行動がみられた。直後、「その」に至り「六期」を表すと推定される数字の「6」を指で描き始める（図8参照）。

結局「この」の時点では、特段指摘すべき「身振り」は創出できていないのだが、後続の身振りに関連づけて捉えれば、「その六期生」につながる状況を仮設するための、準備段階と捉えることもできる。そのように考えた場合、「この」の発話時には、既に話者の中では指示意図があるといってもよいだろう。

つまり、ここでの「この」は、先行発話にない新情報「六期生」を導くための、指示意図を伴う身振りと捉えることもできる。その場合は、連体詞として解釈することが可能となる。対して、直後の「なんか: (F その)」と合わせて解釈するとフィラーとしての機能を備えていると考えることができる。

このように「この」においても、文字起こしのみでは明確でなく、さらには音声と照らし合わせたとしても捉えられない、曖昧な「この」の使用があることがわかった。身振りと照らし合わせて初めて、フィラーと連体詞の連続性を指摘することができる。

5. 全体の考察

以上の分析を踏まえて、ここでは、なぜ指示語はフィラーになり得るのか、という点に焦点をあてて考えてみたい。指示語の原初的性格を残すコソア型のフィラーは、物理的・心理的距離の遠近と品詞性のまじわるところにそれぞれ固有の指示性を残しつつ、聞き手に寄り添った発話者の態度も示す。その原初的性格とは、コ系は話し手まわり・主観性、ソ系は非話し手まわり・非主観性、ア系はそのどちらにも無関係、品詞的にはモノに明確にかかっていくか、コトに漠然と

かかっていくか、ということになるのか。

メイエ (2007: 35) が「話し言葉は、常に話し相手の注意を引き、感受性に訴えることなくしては存在し得ない」と指摘するとおり、話し言葉特有の言語要素・言語現象というものは、しばしば意味の伝達よりも聞き手の関心惹起、感情への間接的な訴えかけをその動機としている場合が少なくない。話し言葉特有のフィラーもまた然りであると思われる。

すなわち、これら指示語由来のフィラーの使われ方を、指示性と聞き手への態度との相関関係として捉える見方も可能である。動画で示されたように、そこに少しでも身振りが伴えば、あるいは視線や顔の向きということであっても、聞き手が注視する現場の身振り空間とそこで発せられる言葉の両方に「コウ」「コノ」は関係づけられる、という二重性を有していることがわかる。ときにはそのどちらかが消失する場合もある。モノやコトが無くても、架空の場を架設できるのも、指示性 (= 指示する対象があるはずだ) の痕跡があって、聞き手も場の架設を受け入れやすいからである。

「ソウ」でも「コウ」でも、フィラー的用法で用いられれば、語彙的意味の少ないすきまのある形式を投げかけて、あとからそれを埋め合わせるという方策をとったことになる。埋め合わせができれば指示性が強くなり、埋め合わせが難しければ場所取りだけのフィラー的要素が強くなる。ただ、聞き手にとっては、どちらの用法であっても構わない。

そうした認定に揺れが生ずるようなケースが多くあることを考えると、コソア系のフィラーを、話し言葉における指示語からフィラーまでの連続的な様相の一環として捉えるという方向も可能かと思われる。

6. まとめと今後の課題

冒頭に述べたように、フィラーを認定する目的で始めた作業だったが、特に「コウ」「ソウ」「コノ」については、フィラーとフィラー以外は連続的であり可変的であると考えた方がよいのではないかと、思われた。本稿「3.2 CEJC におけるフィラー認定」「3.3 コソアドの品詞認定について」で紹介したように、CEJC において「その」「ああ (あー)」「あの」については指示詞としての連体詞・副詞とフィラーを区別して認定している。一方、「こう」「この」「そう」についてフィラーの認定をしていないのは、上記のような理由で妥当であるといえる。

今後の課題としては、指示語と身振りの関係を、引き続き注視していくことが挙げられるが、また片方で、文章とは異なるところの、“談話における指示語の機能”のような大きな観点が必要である点も指摘しておきたい。同時に、コーパスを使って、従来のフィラーのなかでのコソア由来フィラーのはたす役割の整理も必要となってくるであろう。

さらにいえば、指示語は文法論の中で捉えられているが、「文法」は書き言葉寄りの概念体系という側面が強く、話し言葉の変化に富む現実の様相を説明しきれない面がある。おおげさかもしれないが、動画付きコーパス研究の地平には、新しい“話し言葉の文法”というさらに大きな研究分野が開けているように思われる。

参考文献

- 白田泰如・川端良子・西川賢哉・石本祐一・小磯花絵 (2018) 『『日本語日常会話コーパス』における転記の基準と作成手法』『国立国語研究所論集』 15: 177–193.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2019) 『『日本語日常会話コーパス』 モニター公開版 コーパスの設計と特徴』国語研究所日常会話コーパスプロジェクト報告書 3.
- 近藤安月子・小森和子 (編) (2012) 『研究社 日本語教育事典』 東京：研究社.
- 定延利之 (2002) 『『うん』と『そう』に意味はあるか』定延利之 (編) 75–112.
- 定延利之 (編) (2002) 『『うん』と『そう』の言語学』 東京：ひつじ書房.
- 日本語教育学会 (編) (2005) 『新版 日本語教育事典』 東京：大修館書店.
- 坊農真弓 (2002) 『プロソディからみた『うん』と『そう』』定延利之 (編) 113–126.
- メイエ, アントワーズ (2007) 松本明子 (編訳) 『いかにして言語は変わるか—アントワーズ・メイエ文法化論集—』 東京：ひつじ書房.
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 東京：くろしお出版.

関連 Web サイト

- 国立国語研究所『大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究』 <https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/> (2021 年 12 月 10 日確認)
- コーパス検索アプリケーション『中納言』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2021 年 12 月 10 日確認)

Actual Use of the Deictic Words (*Ko*, *So*, *A*, *Do*) are Used in the Corpus of Everyday Japanese Conversation

HOSHINO Yuko^a

TAJIMA Asuka^b

TAKASAKI Midori^c

^aJumonji University/ Project Collaborator, NINJAL

^bMitsumura Educational Co. Ltd.

^cProfessor Emeritus, Ochanomizu University/ Project Collaborator, NINJAL

Abstract

We report the actual usage of such deictic words as *ko*, *so*, *a*, and *do*, based on an analysis of 50 hours of data from the Corpus of Everyday Japanese Conversation (CEJC, 2018 version); watching the videos, we also examined how fillers derived formally from the reference terms are used.

There are two usages of *ko*, *so*, *a*, and *do*, that where the deictic words are parts of speech: adjectives, adverbs, pronouns, or nouns, and that where they express responses, feelings, or fillers—that is, their use as interjections, which derive from deictic words in general. However, though the CEJC indicates the function of filler for *so*, *ko*, and *kono*, it does not define the words as interjections. Thus, we inspected the CEJC videos, paying special attention to these three deictic words; some of them were categorized as adverbs, adnominal words, interjections, or mere fillers. Others cannot be categorized or distinguished at all, partly because the speakers' intentions and gestures are vague, and partly because the speakers were using these fillers without their indicated words. In conclusion, we found the definitions of these words by the CEJC satisfactorily valid.

Keywords: Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC, deictic words, filler, gesture.